The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈書評〉Nina Møller Andersen著 Ordet i livet og ordet i kunsten : Nina先生を偲んで
Author(s)	大辺, 理恵
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2025, 25, p. 69-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［書評］

Nina Møller Andersen 著 *Ordet i livet og ordet i kunsten*[1]

Nina 先生を偲んで

大辺 理恵

1. はじめに

今回，田辺 欧先生の退職記念号となる IDUN25 号への寄稿にあたり，少し長い前置きから始めることをお許しいただきたい．

筆者は学部生であった 2001 年 9 月から 2002 年 6 月までコペンハーゲン大学にデンマーク政府奨学生として留学する機会に恵まれた．その際に受け入れ教員となってくださったのが Nina Møller Andersen 先生であった．

Nina 先生は 1985 年 4 月から 1988 年 3 月まで旧大阪外国語大学デンマーク語専攻に勤務され，さらに先生が 2008 年から 2016 年まで Lektoratsudvalget（デンマーク語教師派遣委員会）[2]の委員長を務められていたこともあり，本専攻をデンマーク本国から多方面にわたってサポートしてくださった．私自身もデンマーク留学中のみならず帰国後も先生には公私にわたりお世話になった．

この Nina 先生が残念なことに 2024 年 4 月に，ご病気のため 72 歳で逝去された．先生が最後に日本を訪問されたのは，新谷俊裕先生が 2019 年 3 月にご退職される際，サプライズゲストとして来ていただいたときであった．それは先生が旧大阪外国語大学でデンマーク語教師をされていたとき以来の来日で，約 30 年ぶりの日本訪問であった．その際には，先生には本専攻にて特別講義をしていただき，また約 30 年前の教え子たちとの再会も実現されるなど，終始とても楽しそうにされていたことを覚えている．また 2023 年 9 月には，当時すでに先生は病気療養中でいらしたが，筆者は田辺先生と 2 人で先生をコペンハーゲンの自宅に訪ねることができた．体調が万全でないにもかかわらず，先生は私たちを歓待してくださり，あのいつもの豪快な笑い声で迎えそして送り出してくださった．筆者にとっては，これが Nina 先生との最後となった．

---

[1] 本著の日本語訳については § 2.2.1 を参照されたい．

[2] Lektoratsudvalget（デンマーク語教師派遣委員会）とは，1937 年にデンマークの教育・研究省（Uddannelses- og Forskningsministeriet）下に設立された諮問委員会のことで，Lektoratsordningen（デンマーク語教師派遣規定）に関して専門的な観点から教育・研究省に助言を行なうことを任務としている．Lektoratsordningen は海外の大学への支援を通じ，デンマーク国外でのデンマーク語に関する知見の普及を目的としており，現在この規定に則り 62 校の海外の大学でデンマーク語が教えられ，約 2000 名の学生がデンマーク語を学んでいる．これらの大学にデンマーク語教師を派遣することも Lektoratsudvalget の任務の一つである．

Nina 先生と筆者の関係は「デンマーク語教師」と「デンマーク語学習者」という側面が非常に大きかったためか，筆者は恥ずかしながら先生の「研究者・言語学者」としての側面にはこれまであまり触れる機会がなかった．ただ先生は晩年，筆者との会話でよく「バフチン」という名前を口にされていた．そして体調を崩された後も「今またロシア語を読んでいるの．バフチンを．日本語も 1 日にワンフレーズ読んでるわよ．どちらも楽しい」とお話されていた．筆者にとって「デンマーク語の先生」であった Nina 先生は，1981 年にコペンハーゲン大学でデンマーク語とロシア語の文学修士号を取得されており，ロシアの思想家ミハイル・バフチン（1895-1975）の専門家でもあったのだ[3]．2023 年に最後に先生にお会いした際，先生は「この本を最近出版したの．バフチンとバフチンの理論について書いたわ」と言って，本稿のタイトルにある *Ordet i livet og ordet i kunsten* を直接筆者に渡してくださった．可愛らしい花の絵が添えられたサインも一緒に．本稿ではこの Nina 先生の最後の著書を大変僭越ながら書評してみたいと思う．

ただし，筆者の専門は「デンマーク語学」であり，バフチンが提唱した様々な理論に対して意見を述べることなど到底できない．したがって，今回の書評がバフチン研究に対して行なう学術的寄与は皆無に等しい．また，すでに我が国で長年にわたる非常に緻密で詳細な研究・翻訳の蓄積があるバフチン研究の観点からは，内容的に専門性に乏しく，バフチンの提唱する様々な理論に関して筆者の理解が至っていない点も数多くあるだろう．しかしながら，Nina 先生はバフチンの理論を説明する際に，デンマーク語で書かれた文学作品やデンマーク語での会話を例に挙げており，それらを用いた先生の説明は「デンマーク語学」にとって有益なものであると考えられる．したがって本稿では，*Ordet i livet og ordet i kunsten* の内容を紹介するにあたり，バフチンの理論については先行研究[4]を参照し，デンマーク語で書かれた文学作品もしくはデンマーク語での実際の使用例に関する説明について紙幅の許す限り紹介するという形をとりたい．

2. 本書について[5]

2.1. 本書の目的

本書を執筆するに至った経緯について，著者は最初に，バフチンの著作に対する関心がここ数十年の間に特に文学研究，教育研究そして文化研究の分野で高ま

[3] Møller Andersen (2004)や Møller Andersen(2005)など．

[4] 具体的な参考文献については，本稿末のリストを参照されたい．

[5] 以下§2 では「本書」は *Ordet i livet og ordet i kunsten* を指し，「著者」は Nina Møller Andersen 氏を指す．

り，それが言語学分野にも広がりを見せていることを指摘している[6]．続いて，多くの場合にこれらの関心は，バフチンの執筆言語，つまりロシア語ではなく，英語やデンマーク語などに翻訳されたバフチンの著作の読解に基づいていること，そしてバフチン自身による著作ではなく，バフチン「について」書かれた文献の読解に基づいていることを指摘している[7]．こうした状況を鑑みて著者は，「言語学の分野においては，バフチンの理論の原語での読解に基づいた，使用可能な分析ツールが必要である；これを本書は提供する[8]」と本書の目的について述べている．さらに，バフチンの使用する概念が原語版の著作においても翻訳版においても漠然とした印象を与えるものであることを認めた上で，「したがって本書の目的はバフチンの（理論で用いられる：筆者付記）概念を理解しやすくし，それらを明解にして言語分析に使用できるものとすることでもある[9]」と述べられている[10]．

2.2. 本書の構成

本書は，冒頭にバフチンのエッセイ「芸術と責任」の著者自身によるデンマーク語訳がおかれ，その後に第１章そして第２章と続く．第１章は主にバフチン自身の人生と著作について，第２章はバフチンの理論のうち言語学関連の分野での分析に使用可能な概念について扱われている．

以下本書の構成に沿って，まずは冒頭のエッセイと本書のタイトルの関連性について述べる．次に第１章の概要を示し，バフチンが考え出した理論の解釈に混乱が生じている原因に対する著者の見解を示す．第２章に関しては，各節ごとに

---

[6] Møller Andersen (2021: 7)．また桑野（2020: 318）にも，バフチン関連の著書に関して以下のように記述されている．

> このように、ロシアでは（個々の論文はさておき）バフチン関連の著書があまり出版されなくなってきたのにたいして、英語文献の出版はさほど勢いを失っていない。入門書に近い書籍もいまなお公刊されている一方、演劇や映画、美術等の分析にバフチンを活かした著書が相次いでいる。
> また全体としては、日本語文献でもそうだが、積極的にバフチンの理論や思想を「現場」で実践していこうとする動きが目立ってきている。芸術以外にも、教育、精神治療（とりわけ「オープンダイアローグ」）、介護、異文化コミュニケーション、第二言語習得、メディア、その他の関係の文献において、バフチンが引用されているケースが少なくない。

[7] Møller Andersen (2021: 7).

[8] Der er inden for sprogvidenskaben behov for et anvendeligt analyseapparat baseret på læsning af Bachtins teorier på originalsproget; dette tilbyder denne bog (Møller Andersen 2021: 7).

[9] Et af formålene med denne bog er derfor også at klargøre Bachtins begreber, gøre dem entydige og anvendelige til sprogbrugsanalyser (Møller Andersen 2021: 8).

[10] 本書はデンマーク語で執筆されているため，著者が「言語学の分野」と述べる際には，当然「デンマーク語研究」が念頭に置かれていると考えられる．実際に本書で「言語分析」の例として提示されているのは全てデンマーク語に関するものであった．

紹介されているバフチンの概念・理論の概要を示し，それらを著者がどのように言語学的な分析に用いることができると例証しているのかを可能な限り紹介する．

2.2.1. 冒頭のエッセイ

冒頭のエッセイ「芸術と責任」は，1919 年 9 月 13 日に『芸術の日』という新聞に掲載されたものである[11]．このエッセイ「芸術と責任」について，桑野（2020: 29-30）では以下のように紹介されている．

> そこには、「芸術と生活は同一のものではないが、わたしのなか、わたしの責任という統一性のなかで、ひとつにならねばならない」と記されている。（中略）この「わたし」の「責任」の果たし方こそ、バフチンの生涯の課題であった。（中略）
>
> その意味では、日本語訳にして一五〇〇字にも満たないこのエッセイ「芸術と責任」は、バフチンのその後の仕事を理解するうえできわめて重要な位置を占めているといえよう。
>
> 「ひとが芸術のなかにあるときは生活のなかになく、逆に生活のなかにあるときは芸術のなかにない」と批判するバフチンの姿勢は、その後の著作にも当然反映されており、哲学、美学、文学、言語学、その他、テーマはなんであれ、それらは「理論」の展開であると同時に、日々の「実践」の書にもなっていることに、わたしたちも容易に気づくことになろう。　（下線は筆者による）

桑野（2020）が「芸術」そして「生活」と表している部分が，本書のタイトルではそれぞれ kunsten そして livet に該当する[12]．また著者は本書の前書きにあたる部分で以下のように述べている．

> このサークルでは生活と芸術が結び付いていて，切り離せないものであった，とりわけ対話を通じて；これこそが私が長年の研究者生活を通じてバフチンの著作に魅了されてきた点である．私は，コペンハーゲン大学のスラブ語学科での学生時代から，バフチンの著作を通じて，言語使用の分析を行なうためのツールを獲得してきたが，それらは，あらゆる言語使用（文学におけるものも含め）は，対話論的な観点から捉えられる

[11] 桑野（2020: 29）．尚，この「芸術と責任」の日本語訳については，バフチン著／伊藤・佐々木訳（1999: 13-15）に全訳が掲載されている．

[12] 著者によれば，本書のタイトルはバフチンが「バフチン・サークル」のメンバーでもあったヴォローシノフ（1895-1936）名で発表した論文に由来するという．本書の中では具体的な論文名は言及されていないが，筆者が調べた限りは，おそらく 1926 年に発表した論文「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉―社会学的詩学の問題によせて」が該当すると思われる．日本語訳については，バフチン著／桑野・小林訳（2002: 220）を参照した．

し捉えられるべきである,「あなた」がいないところに「わたし」は存在しない，という考え方，そしてこの対話主義には個人的な責任が伴うという考え方に立脚するものである.[13]

言語に対するバフチンのこのような考え方が表れているものとして，著者はエッセイ「芸術と責任」を冒頭に掲げ，またこの責任は「生活のなかの言葉（言語使用）と芸術のなかの言葉（文学）[14]」に対するものであると述べている．よって本書のタイトルを日本語に訳すならば『生活のなかの言葉と芸術のなかの言葉』と訳すのが適切であろう.

2.3. 第１章

第１章「ミハイル・バフチン（M.M. Bachtin)」はさらに３つの節に分かれており，それぞれ第１節「バフチン：人生と著作（Bachtin: liv og værk)」，第２節「バフチンを読むこと (Bachtin-læsninger)」, 第３節「概念の混乱 (Begrebsforvirring)」というタイトルが付けられている.

第１節では，バフチン自身の生い立ちや「バフチン・サークル」について，そしてバフチンの名前と共に使用される様々な理論が具体的にバフチンのどの著作と関連しているのかということが説明されている[15].

第２節では，バフチンの著作を読むことあるいはバフチンの提唱した様々な理論を理解することが難しいとされる理由として，①バフチン自身がもつ神秘性や②バフチンの著作活動と「バフチン・サークル」との関係，③バフチンが著作活動をしていた当時の状況，④バフチンの著作が翻訳される際に生じる解釈のズレそして⑤バフチン自身の書き方の５点の可能性を挙げている[16]．またバフチンの著作を読む際のアプローチが複数あることを認めた上で，本書が行なっている読み方を「原文（ロシア語で書かれているものが好ましい）のテキストの精読，ただし常にそれらが書かれた時代を念頭におきながら[17]」と規定している.

第３節では，バフチンの著作が様々な読み方をされていることが，現在，バフ

---

[13] I denne kreds var liv og kunst forbundet, uadskillelige, ikke mindst gennem det dialogiske; og det er også her min fascination af Bachtins værker gennem et langt forskerliv ligger. Jeg har gennem Bachtins værker siden min studietid på Slavisk Institut ved Københavns Universitet fået værktøjer til analyser af sprogbrug ud fra en holdning om at al sprogbrug (også den der ligger i litteraturen) kan og skal angribes ud fra en dialogisk synsvinkel, intet 'jeg' uden et 'du', og ud fra en holdning om at der ligger et personligt ansvar i denne dualisme (Møller Andersen 2021: 7).

[14] ordet i livet (sprogbrugen) og ordet i kunsten (litteraturen) (Møller Andersen 2021: 8).ここで ordet の訳語として「言葉」を用いたのは，バフチン著／桑野・小林訳（2002）に倣った.

[15] Møller Andersen 2021: 17-19.

[16] Møller Andersen 2021: 21-23.

[17] (…) en nærlæsning af originaltekster (gerne på originalsproget), men hele tiden med sideblik til den tid de er skrevet i (Møller Andersen 2021: 24).

チンの理論が様々な分野で応用されていることにつながっていると指摘されている[18]．しかし同時に「バフチンの提唱する概念が誤って理解され，誤用され，またその概念がもはやバフチンが提唱したものとは言えないほどに，バフチンが使用した元々の意味からかけ離れてしまっている[19]」場合があることも指摘されている．著者はその理由として，バフチン本人によるテキストではなく，バフチンが書いた著作の解説書が参照されていることを挙げている[20]．その上で著者は，言語学において，バフチンが自身の著作で説明している概念・理論と，実際に応用されている分野で解釈にズレが生じている様子を一覧にして明示している[21]．解釈上のズレは含みながらも，バフチンが 20 世紀初頭に考えていた概念・理論は，「文」ではなく「発話」を言語分析の対象とするなどの点で，言語学が 20 世紀を通じて発展させてきた理論との共通点も多く，その先見性を指摘している[22]．

2.4. 第 2 章

第 2 章「バフチンが提唱したことばに関する概念（Bachtins sprogbrugsbegreber）」は，さらに 8 つの節に分かれており，それぞれ第 1 節「バフチンが提唱したことばに関する概念への導入：対話論（Introduktion til Bachtins sprogbrugsbegreber: det dialogiske）」，第 2 節「他者の言葉（Det fremmede ord, tjusjoje slovo）」，第 3 節「ポリフォニーそして二声の言葉（Polyfoni og det tostemmige ord）」，第 4 節「上位の受け手（Superadressaten）」，第 5 節「ヘテログロシア（Heteroglossia）」，第 6 節「ことばのジャンル（Talegenrer）」，第 7 節「イントネーション（Intonation）」，第 8 節「クロノトポス（Kronotopen）」というタイトルが付けられている[23]．

第 1 節ではバフチンの様々な理論において中心的な役割を果たす概念として「対話論」が紹介されている．著者は「“存在にとっての最低数”は 2 であるとい

---

[18] Møller Andersen 2021: 25.

[19] (…), Bachtins begreber er blevet misfortolket, misbrugt eller har fjernet sig så meget fra Bachtins oprindelige brug at man ikke længere kan kalde dem bachtinske (Møller Andersen 2021: 25).

[20] Møller Andersen 2021: 25.

[21] Møller Andersen 2021: 26.

[22] Møller Andersen 2021: 27.

[23] 節タイトルの日本語訳では「言葉」と「ことば」という語を用いているが，この 2 つの語の意味の差異は，バフチン著／桑野・小林訳（2002: 6）に倣い，「言葉」は「(1)言語学の対象である言語体系に対置した「具体的で生きた総体としての言葉」」という意味で，また「ことば」は「(1)言語（能力）、(2)（言語のさまざまな）スタイル、(3) パロール、(4) 話、会話、(5) 演説、スピーチ、(6) 音声言語、(7) 話法、その他さまざまな語義」を含むものとする．

う考えが，バフチンの思想にある根元的条件である[24]」と述べ[25]，バフチンの「対話論」が端的に表されている記述として以下を引用している[26].

> 言葉の無いところ、言語の無いところには、言語的関係はありえない。
> （…）対話的関係―これは言語コミュニケーションにおいて、どんな発話のあいだにも認められる（意味的な）関係である。（新谷他訳 1988: 220）[27]

著者は「バフチンは同時代の言語学者, つまり構造主義者や形式主義者たちが, 言語の対話的な構造を見逃しているとして批判している[28]」ことを指摘し，バフチンがいわゆる言語の形式的な側面を扱った言語体系ではなく，誰が誰に向けて何をどのような場面でどのように「発話」するのかといった，言語の語用論的な側面について考えること，つまり言語に関する研究として「発話」を対象とすることの必要性を論じていた点でその先見性を強調している[29]．またこのバフチンの「対話論」に影響を受けた概念・理論として言語学者ジュリア・クリステヴァの「間テクスト性」を挙げている．

第 2 節では，バフチンの著作のうち主に *Voprosy literatury i estetiki*（1975）[30]と *Problema tvortjestva Dostojevskogo*（1929）[31]からの抜粋を著者自身が翻訳・引用し，「他者の言葉」という概念を紹介している．著者によればこの概念が「ポリフォニー小説（den polyfone roman）」や「二声性（tostemmigheden）」を理解する上で重要であるという[32]．著者はこの「他者の言葉」を説明するため，デンマーク語の会話例を用いている．

---

[24] Ideen om at 'eksistensens minimum' er to, er en grundbetingelse i Bachtins tænkning og filosofi (Møller Andersen 2021: 31).

[25] この点については，桑野（2021: 6）でも以下のように指摘されている．

> バフチンは、「人間がこの世に存在している」ということは、「対話をしている」「対話的関係にある」ということなのだといっていました。それどころか、「対話がおわるとき、すべてはおわる」とまで断言していました。つぎのようにも述べています。ひとつの声はなにもおわらせはしないし、なにも解決しない。ふたつの声が、生きていくための必要最低限の条件であり、存在していくための必要最低限の条件なのである。

[26] 以下，本書中にあるバフチンの著作からの引用については，該当するテキストの日本語訳を掲載し，本書の引用箇所を脚注で示すこととする．

[27] Møller Andersen 2021: 34.

[28] Bachtin kritiserer sin samtids lingvister, dvs. strukturalister og formalister, for at overse sprogets dialogiske indretning (Møller Andersen 2021: 35).

[29] Møller Andersen 2021: 35.

[30] 本書で引用されているバフチン自身による著作については，Møller Andersen（2021）の参考文献の記述に倣う．日本語訳としては『ミハイル・バフチン著作集⑤ 小説の言葉』（伊東訳 1979）を参照した．

[31] 日本語訳としては『ドストエフスキーの創作の問題　付：より大胆に可能性を利用せよ』（桑野訳 2013）を参照した．

[32] Møller Andersen 2021: 39.

(1) Skolelæreren: Hvor mange gange har jeg bedt jer om at tage jeres bøger frem?
Frække Ole: Ork, masser af gange.
Flittige Lise: Jeg har altså taget mine bøger frem for længe siden.
Dovne Lars: OK, jeg skal nok tage dem frem nu.
Liu fra Kina der kun har været i Danmark i et år og gerne vil svare korrekt: Tre gange. (Møller Andersen 2021: 54-55) [33]
＜先生：私は何度あなたたちに本を取り出すように言いましたか？
生意気な Ole：そりゃあ，何度も．
真面目な Lise：ずっと前に本を取り出しました．
怠け者の Lars：はい，今から取り出します．
中国出身の Liu（デンマークに 1 年しか滞在しておらず，正しく答えたいと思っている）：3 回です＞

著者の説明[34]によれば，(1) の先生の発話への返答から，各生徒が反応している「他者の言葉」が異なることが分かるという．生意気な Ole は先生の発話に内在する「他者の言葉」を＜なぜ本を取り出さないのだ＞という【非難】と理解し，それを意図的に無視した回答をし，反対に真面目な Lise はその【非難】に反応している．また怠け者の Lars は，先生の発話に内在する「他者の言葉」を＜本を取り出せ＞という【要求】だと理解し反応している．そして外国人の Liu には「他者の言葉」は聞こえておらず，発話を文字通りの意味で解釈し回答している．

第 3 節では，バフチンの著作のうち主に *Problema tvortjestva Dostojevskogo* (1929)からの抜粋を著者自身が翻訳・引用し，「ポリフォニー」そして「二声の言葉」という概念を紹介している．著者はバフチンにとって「ポリフォニー[35]」という概念は文学的な概念であることを強調し[36]，デンマーク文学において「ポリフォニー小説」的な特徴を持つ作家として，Henrik Pontoppidan（作品例は *Lykke-Per*）や Svend Åge Madsen（同 *Syv alders galskab*）そして Jens Smærup Sørensen（同 *Mærkedage*）を挙げている[37]．

この「ポリフォニー」という用語については，筆者が 2006 年から 2009 年まで

---

[33] 本書の中では，本文の一部として書かれている内容を，筆者が例文の形に整えた．
[34] Møller Andersen 2021: 54-55.
[35] 桑野（2021: 25-28）によれば，ポリフォニーとは元々は＜多声音楽＞という意味の音楽用語であるが，バフチンがドストエフスキーの長篇小説の特徴（＝例えば，小説の登場人物たちの声や意識がそれぞれにそして作者からも自立し価値を持っていること）を述べる際に，この用語を比喩的に用い「ポリフォニー小説」と記したという．バフチンによるポリフォニーの定義については桑野（2020: 111-115）を参照されたい．
[36] Møller Andersen 2021: 61.
[37] Møller Andersen 2021: 64.

ロスキレ大学に留学していた頃に，当時同大学で行なわれていた Sprogligt polyfoninetværk[38] ＜言語的ポリフォニーについて考える会＞というプロジェクトに関連して耳にした．このプロジェクトの成果の一部は，現代デンマーク語を扱った文法書 *Grammatik over det Danske Sprog* における心態詞の説明にも見受けられる[39]．しかしながら，著者が本書を通じて強調しているように，バフチン自身が記した概念・理論とその後様々な分野に応用され発展していった概念・理論の間にはズレが生じている場合があり，著者によれば当プロジェクトにおける「ポリフォニー」は，バフチンの概念・理論では，「ポリフォニー」ではなく，以下の「二声の言葉」との関連性が強いものであるという[40]．

「二声の言葉」については，バフチン自身による図式化の中から「文体模倣（stilisering)」,「パロディー（parodi)」そして「隠された対話（skjult dialog)」が取り上げられている.「文体模倣」については, 発話者の声（ordets autors stemme）と他者の声（en fremmed stemme）が同じ方向を向いており，例えば若者の発音や言語使用の（肯定的な）模倣が例として挙げられている[41]．「パロディー」では発話者の声と他者の声は対抗しており, 若者の発音や言語使用の模倣であっても，それに同調するのではなく距離を取り，その現象を皮肉るもしくは野次るような態度が含まれると説明している[42]．そして「隠された対話」については，会話の参与者ではない第３者に向けられた対話であるとした上で, 以下の例を挙げている．

（2）Moren: Tag fødderne ned fra sædet; du ved godt, sådan gør vi ikke derhjemme.（Møller Andersen 2021: 72）[43]

＜母親：座席から足をおろしなさい，家でそんな風にしないでしょ＞

著者によれば（2）を公共の場（＝バスの中）での母親から子供への発話とした場合，発話内容が子供に伝えている情報（＝座席から足をおろせという【要求】）

---

[38] このプロジェクトは, 当時ロスキレ大学に在籍していた Rita Therkelsen 氏を発案者とし 2003 年から 2007 年にかけて行なわれた．同大学からは他に Eva Skafte Jensen 氏や Lars Heltoft 氏も参加しており，プロジェクトの中心的メンバーに，オーフース大学から Henning Nølke 氏そしてコペンハーゲン大学から本書の著者も参加していた．著者はバフチン研究の専門家として，Nølke 氏はフランス人言語学者 Osward Ducrot のポリフォニー理論（：Therkelsen（2004: 79）では Ducrot がバフチンのポリフォニー理論から影響を受けていることが指摘されている）をデンマーク語にも適用できるよう ScaPoLine（：Therkelsen（2004: 79）によれば，La théorie SCAandinave de POlyphonie LINguistique を省略したもの）という理論に発展させた研究者として参加していた．

[39] Hansen & Heltoft 2011: 1037.

[40] Møller Andersen 2021: 65．また桑野（2021: 28）でも，バフチンによるポリフォニーの定義とは異なり，研究者によってはポリフォニーを＜声の複数性＞という意味で用いる場合も少なくないことが指摘されている．

[41] Møller Andersen 2021: 68.

[42] Møller Andersen 2021: 69.

[43] 本著の中では，本文の一部として書かれている内容を，筆者が例文の形に整えた．

は，それほど重要なものではないという．実際のところ，この発話はバスにいる他の乗客に向けられており，母親は自身が子供の躾に関して常識的な見解を持ち合わせていることを他の乗客に伝えているのだと著者は指摘している[44]．

第 4 節では，バフチンの著作のうち論文集 *Estetika slovesnogo tvortjestva* (1979)に掲載された覚書を著者がデンマーク語に翻訳した”Teksten som problem i lingvistik, filologi og andre humanistiske videnskaber. Forsøg på en filosofisk analyse”（Møller Andersen & Klimenko 1995）[45]からの抜粋を主に引用しながら，「上位の受け手」という概念を紹介している．著者によれば，バフチンは対話の場面で 3 種類の要因を考えており，第 1 の要因は話し手（autor / afsender），第 2 の要因は受け手（adressat：これは実在の場合も想定の場合もある），そして第 3 の要因が上位の受け手（superadressaten）であるという[46]．「上位の受け手」について著者は，以下のバフチンによる説明を引用している．

> それは全一な発話を構成する本質的な要因であって、より深く分析するなら、発話のなかに見いだされるはずである。（新谷他 1988：237）[47]

さらに「この第 3 の要因は（…）神や国民などのような，様々な多かれ少なかれ具体的な形を取り得る[48]」としている．

第 5 節では，「ヘテログロシア（Heteroglossia）」という語をタイトルとして用いているが，著者はこの語はバフチン自身が使用したものではなく，アメリカ人のバフチン研究者 Michael Holquist と Caryl Emerson が発明した用語だと指摘している[49]．その上で，この用語がバフチンが用いた 3 つの概念：①rasnojasytjije（forskelligsproghed＜言語の多様性＞[50]），②rasnorejije（forskelligtale＜ことばの

---

44 Møller Andersen 2021: 72.

45 日本語訳としては『ミハイル・バフチン著作集⑧ ことば 対話 テキスト』（新谷他訳 1988）に収録されている「テキストの問題（1959-1961）―言語学、文献学および人文諸科学におけるテキストの問題。哲学的分析の試み」（佐々木訳）を参照した．

46 Møller Andersen 2021: 76-77.

47 Møller Andersen 2021: 77.

48 Den tredje kan (…) have forskellige mere eller mindre konkrete former: Gud, folket etc. (Møller Andersen 2021: 77).

49 桑野（2020: 168）は「ヘテログロシア」について以下のように述べている．

> 日本では、この heteroglossia が「ヘテログロシア」あるいは「異言語混淆」として広まっている。この訳語は言語内の「社会的分化・層化」をよく伝えていて、（中略）、ただし、「異言語混淆」の「言語」が民族語とか国語の意味ではなく主として「ディスクール（言語表現の総体）」を意味していることを念頭においておく必要はある。

50 著者によればこの概念は，形態や統語など，言語の体系的な側面に着目したものだという（Møller Andersen 2021: 103）．またこの日本語訳は桑野（2020: 167）に倣った．

多様性＞[51]），③ rasnogolositsa（forskelligstemmighed＜声の多様性＞[52]）に基づいていることを説明している[53]．しかしながら，この heteroglossia という用語が研究者ごとに様々に使用されていることや，一貫した定義が存在しないことなどから，バフチンが用いた３つの概念を heteroglossia と１つにまとめることには無理があるとしている．そしてデンマーク語においては heteroglossia という単語は用いずに，多少デンマーク語らしくない響きになろうとも３つの概念を上記のように３種類のデンマーク語で訳し分けることを提案している[54]．

第６節では，バフチンの著作のうち論文集 *Estetika slovesnogo tvortjestva*（1979）の一部を英訳した *Speech Genres and Other Late Essays*（1986）[55]から主に引用し，バフチンによる「ことばのジャンル」という概念について説明している．著者は特に，バフチンがジャンルの問題を言語（発話）から規定しようとしたにもかかわらず，この概念を定義し使用しているのが主に文学者であるため，混乱が生じているとしている[56]．また著者は，バフチンが「ことばのジャンル」で説明しようとしたことは，1960 年代にオースティン（J.L. Austin）やサール（J.R. Searle）などが西欧で展開していった発話行為理論と共通する部分が多いことを指摘し，バフチンの概念・理論の先見性を評価している[57]．

さらにバフチンの「発話」は１語のセリフの場合もあれば，１冊の長編小説や１遍の手紙にもなり得る点を指摘し，だからこそバフチンにとって「発話（言語）」とは言語学の境界を越えて，文学そして文化の領域へと広がっていくものであったと指摘している[58]．加えてバフチンが「発話」を第一次ジャンル[59]と第二次ジャンル[60]とに分類していることにも触れ，例として①歯医者の定期検診連絡と② Michael Strunge の *Her er i en pistol i ord* という詩を挙げている．どちらも第一

---

[51] 著者によればこの概念は，言語の語用論的な側面に着目したもので，本書の第６節で取り上げられている「ことばのジャンル」の概念に近いという（Møller Andersen 2021: 103-104）．またこの日本語訳は桑野（2020: 167）に倣った．

[52] 著者は，この用語自体は，先の２つに比べてバフチンがそれほど頻繁に使用していないことを指摘した上で，この用語が様々な見解を示す声について扱っていると説明している（Møller Andersen 2021: 104）．またこの日本語訳は桑野（2020: 168）に倣った．

[53] Møller Andersen 2021: 87.

[54] Møller Andersen 2021: 111-112.

[55] 日本語訳としては『ミハイル・バフチン著作集⑧ ことば 対話 テキスト』（新谷他訳 1988）に収録されている「ことばのジャンル（1952-1953）」（佐々木訳）を参照した．

[56] Møller Andersen 2021: 113-114.

[57] Møller Andersen 2021: 124-128.

[58] Møller Andersen 2021: 124.

[59] 桑野(2020: 83)によれば，「日常生活の簡単な会話、手紙、実務文書、ジャーナリズムの評論などのような比較的単純なもの」とされている．

[60] 桑野（2020: 83）によれば，「小説、戯曲、学術論文、社会政治評論その他のような複雑なもの」とされている．

次ジャンルとしては，読み手にある行動を促す点で共通しているが，②が次のプロセスとして芸術作品，つまり第二次ジャンルに移行しているのに対して①ではそのプロセスが起こっていないことを指摘している[61].

第7節では，バフチンの「イントネーション」という用語を説明するため，第6節同様 *Speech Genres and Other Late Essays*（1986）からの引用を主に用いている．例えば著者は以下の引用を通じて，

> 言語の単位としての語も文も、表情ゆたかなイントネーションを欠いている。語が単独で、表情ゆたかなイントネーションをともなって発せられるとき、それはもはや語ではなく、（語を文にまで展開するための基盤をまったく抜きにして）一語で表現された、完結した発話になる。
>
> （新谷他 1988：162-163）

バフチンにとっては「イントーネーション」も話し手の意図や個性の表出として捉えられていたことを指摘している[62].

第8節では，バフチンの著作のうち論文集 *Voprosy lietratury i estetiki*（1975）の一部を英訳した *The Dialogic Imagination*（1981）に掲載されている”Forms of time and chronotope in the novel“[63]から主に引用し，バフチンの「クロノトポス」という概念が文学に関連したものであることを指摘している.[64] その上で, 言語学への応用例として「運動感覚的イメージスキーマ」,「ダイクシス」そして「意味役割」という観点から Søren Ulrik Thomsen の詩集 *Rystet Spejl* から3編の詩を取り上げて分析している[65].

本書はここで終えられており結論部分を欠いている．それが意図的なものであったのかどうかは今となっては知ることはできない．しかしながら，第2章の各節において，実際にどのようにしてバフチンの提唱する複雑な概念をデンマーク語の分析に用いることができるかが例証されており，§2.1 で触れた本書の目的は達成されていると言えるだろう．

---

[61] Møller Andersen 2021: 130-135.

[62] Møller Andersen 2021: 141.

[63] 日本語訳としては『ミハイル・バフチン著作集⑥小説の時空間』（北岡訳 1987）を参照した.

[64] 著者は，バフチンの著作から「クロノトポス」の定義として以下を引用している.

> 文学がこのように芸術化して自らのものとしてきた、時間的関係と空間的関係との本質的な相互連関を、ここでは、クロノトポスと呼ぶ（「クロノトポス」とは、文字通りに訳せば、「時空間」である）。（北岡訳 1987：7）

[65] Møller Andersen 2021: 154-160.

3. おわりに

本稿では Nina Møller Andersen 著 *Ordet i livet og ordet i kunsten* の内容を紹介した．書評論文では，本来は，当該書について学術的な批判などを加えるべきなのだろうが，§1 でも述べたように，筆者はその学術的な基盤を持ち合わせていない．しかし今回本書を通して，Nina 先生が「言語を対象とした研究」というものをどのように捉えていたのかが理解できたように思う．おそらく先生にとっても，「言語を対象とした研究」とはバフチンが捉えていたように，音韻法則そして（形態や統語関係を扱う）文法のような，ある意味で定式化した規則の記述だけに制限されるものではなかったのであろう．そうではなくて，それらの規則・体系に基づいて，１人の人間がある場所ある時間に誰かに向けて実際に発した，言い換えれば誰かとの対話を志向した「発話」（それは１語のこともあれば長編小説の場合もある）を対象としたものであったのだろう．

ここで本著のタイトルについて，筆者が普段授業で扱っている内容や研究対象という観点から述べておきたい．本専攻においては，留学期間も含め，習得の目標となるデンマーク語はいわゆる ordet i livet＜生活のなかの言葉＞を中心としたものであろう．しかしこれまで田辺先生が担当されてきた講読や文学ゼミ，そして筆者自身が担当している講読では主に文学作品を読んでおり，そこで触れているデンマーク語は ordet i kunsten＜芸術のなかの言葉＞に近いと言える．Nina 先生の著書には，これらのデンマーク語のどちらにも触れることが重要であることを読み取ることができた．実際，筆者の恩師である新谷先生や Lars Heltoft 先生からも常日頃「デンマーク語について知りたければ，文学作品を読め」という助言を頂いている．また 2013 年度には田辺先生と『デンマーク語で四季を読む』というデンマーク語学習者向けのテキスト集を作る機会にも恵まれた．その際，田辺先生からデンマーク語で書かれた文学作品のテキストを次から次へとご提案いただき，先生のデンマーク文学への造詣の深さに感銘を受けた．芸術のなかのデンマーク語にこれほどまでに深く長く触れてこられた田辺先生にデンマーク語を教わることができたことは，筆者にとってこれ以上にない幸運であった．

また Nina 先生は *Ordet i kunsten og ordet i livet* の中で，バフチンを原語で読むことの重要さを繰り返し強調している．筆者が本書を通読するにあたって，全ての引用部分について日本語の翻訳を参照することが可能であったが，それらは全てロシア語から直接日本語に翻訳されたものであった．今回，バフチンという思想家およびバフチンの考えた概念・理論について，全くの無知であった筆者が本書を読み通すことができたのは，これらの日本語訳があったからこそである．自分の普段の研究生活に照らし合わせて考えると，筆者が日頃使用しているデンマーク語で書かれた文法書などの情報についても，日本語に訳しておくことの大

切さを今一度考えるきっかけにもなった．

最後に，本書を読むことは少なからず Nina 先生と対話することであったように思う．非常に濃密で貴重な時間であったが，先生に直接質問することができないことが残念であり，そしてとても寂しい．ただ，今後は本書から得た知見を，筆者自身がデンマーク語の文学作品を読む際に何らかの形で活用していきたいと思う．その過程できっとまた Nina 先生と対話できることを信じて．

Ordet i livet og ordet i kunsten (Af Nina Møller Andersen)

Til minde om Nina Møller Andersen

Resumé

Rie Obe

Denne artikel er en anmeldelse af *ordet i livet og ordet i kunsten* af Nina Møller Andersen, som sov ind april 2024. Nina var dansklærer på danskafdelingen ved Osaka Universitet for fremmede studier i 4/1985-3/1988, og derefter hjalp hun også danskafdelingen gennem årene. Nina var også formand for lektoratsordningen i 2008-2016 og støttede danske studier verden over. Men hun var også ekspert i den russiske tænker, Michael Bachtin. *Ordet i livet og ordet i kunsten* handler om hans liv, hans værker, hans begreber og teorier. Disse begreber og teorier, som Nina Møller Andersen indrømmer er diffuse, illustreres med autentiske eksempler fra dansk litteratur og dansk sprogbrug. I bogen kan man også læse, at Nina Møller Andersens sprogsyn er stærkt inspireret af Bachtins teorier, som det f.eks. fremgår af det følgende citat: ”al sprogbrug (også den der ligger i litteraturen) kan og skal angribes ud fra en dialogisk synsvinkel, intet ’jeg’ uden et ’du’”.

参考文献

バフチン・ミハイル．伊東一郎訳．1979.『ミハイル・バフチン著作集⑤ 小説の言葉』．東京：新時代社.

バフチン・ミハイル．北岡誠司訳．1987.『ミハイル・バフチン著作集⑥ 小説の時空間』．東京：新時代社.

バフチン・ミハイル．新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛訳．1988.『ミハイル・バフチン著作集⑧ ことば 対話 テキスト』．東京：新時代社.

バフチン・ミハイル．桑野隆・小林潔訳．2002.『バフチン言語論入門』．東京：せりか書房.

バフチン・ミハイル．桑野隆訳．2013.『ドストエフスキーの創作の問題　付：より大胆に可能性を利用せよ』．東京：平凡社.

バフチン・ミハイル．伊東一郎・佐々木寛訳．1999.『ミハイル・バフチン全著作【第一巻】［行為の哲学によせて］［美的活動における作者と主人公］他』．東京：水声社.

Bakhtin, M.M. Oversat af Nina Møller Andersen & Sveltana Klimenko. 1995. ”Teksten som problem i lingvistik, filologi og andre humanistiske videnskaber. Forsøg på en filosofisk analyse.”, *Kultur og Klasse 79*, 43-70. Holte: Forlaget Medusa.

Emerson, Caryl & Michael Holquist (eds.). 1986. *Speech Genres and Other Late Essays M.M. Bakhtin*. Austin: University of Texas Press.

Hansen, Erik og Lars Heltoft. 2011. *Grammatik over det Danske Sprog II.* Odense: Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. Syddansk Universitetsforlag:

Holquist, Michael (ed.). 1981. *The Dialogic Imagination Four Essays by M.M. Bakhtin*. Austin: University of Texas Press.

桑野隆．2020.『［増補］バフチン』．東京：平凡社.

桑野隆．2024（2021）.『生きることとしてのダイアローグ　バフチン対話思想のエッセンス』．東京：岩波書店.

Møller Andersen, Nina. 2004. ”Polyfoni og Bachtin”, *Sproglig Polyfoni. Arbejdspapirer 1*, 3-16. Roskilde: Institut for Sprog og Kultur, Roskilde Universitetscenter.

Møller Andersen, Nina. 2005. ”Den tredje mand eller lidt om den tredje (superadressaten) i Bachtins diskursteorier”, *Sproglig Polyfoni. Arbejdspapirer 2*, 3-14. Roskilde: Institut for Sprog og Kultur, Roskilde Universitetscenter.

Møller Andersen, Nina. 2021. *Ordet i livet og ordet i kunsten – Bachtins sprogbrugsbegreber*. København: U Press.

田辺 欧・大辺理恵編著．2014.『デンマーク語で四季を読む―デンマーク文化を学ぶための中・上級テキスト集―』．広島：渓水社.

Therkelsen, Rita. 2004. ”Polyfoni som sproglig begrebsramme og som redskab i tekstanalysen”, *Sproglig Polyfoni. Arbejdspapirer 1*, 79-109. Roskilde: Institut for Sprog og Kultur, Roskilde Universitetscenter.